

「追憶」

浄法寺日記より

岩手県立福岡高校第二十四代校長

(平成二十五〜二十六年度)

現盛岡第四高等学校校長

高橋 隆



平成二十五年四月、初めての浄法寺。まさに昭和の時代を想わせる町並。一見、不便さを感じさせるようにも思えるが、その不便らしきものが、生きる上での工夫と知恵を育んでいるようだ。

好天と荒天の繰り返し。五月晴れ。道々は、桜の花がまだ残り、躑躅や林檎の花が咲き誇っている。浄法寺校は、つかの間の樂園の感がある。

十月も末、小雨の中、二戸から浄法寺へ向

かう。月半ばから進んだ紅葉も峠を越えつつある。職員朝会の後の全校集会。「一昨日統合検討委員会が行われました。浄法寺校は平成二十八年に福岡本校と年次統合されることになりました。自分たちの手で浄法寺校の歴史を閉じることになります。これからは、浄法寺校の記憶をしっかりと記録することが大切な役割となります」数年前からの懸案、来るべきものが遂に来た、という生徒の表情。統合までの間の生徒への配慮、本校との交流、閉校までの業務への展望など、様々な思いが巡る。

台風による通学路、グラウンド法面崩落、統合決定、激変の浄法寺校の一年目。学検もなく三月を迎える。雪解けも進み校舎の屋根からは滴が間断なく落ちてくる。一人ひとりの生徒を見るにつけ、浄法寺校の有り難さを実感する。今となつては残り二年、明日へ続く道を一步一步踏みしめてゆかねばならない。次年度の穏やかな日々を願う。

九月、文化祭のため岩屋橋からバスで浄法寺に向かう。昨年は台風接近前の雨降り、残念ながら太鼓は屋内での演奏となった。翌日、浄法寺地区は大洪水に見舞われた。今年こそは祭日和を期待したが曇り空。生徒は、昨年以上に真剣そのもの。さすが屋外での浄法寺太鼓は予想どおり大好評。気負いもなく、のびのびとした若者達。これで最後かと思えば感慨もひとしお。演奏途中、かなたの空にくっ

きりと虹が架かる。素晴らしさが素晴らしさを呼ぶ。

朝から霧の二月。思いのほか気温が上がる。学校評議員会。「学校教育の領域を超える丁寧な指導に感謝」「残り二年をプラス志向で」「生徒達は本当に成長した」「失ってみて学校の有り難さがわかる」「最後まで地域の魅力を感じることが出来る生徒であつてほしい」本当に有り難い評議員の言葉。

募集停止となつてからの二年目。少なくなる生徒、校長が生徒と接するのは限られた機会しかなかった。必ずしも自己をうまく表現し、伝えられる生徒ばかりではなかった。しかし、素朴に素直に接してくれた。これが浄法寺らしさ、良さなのだと思う。今年の冬、分校までの雪のない鹿角街道。二戸から浄法寺へ向け似鳥トンネルを抜けると、滝野橋の手前の山間に滝が見える。今まで気づかなかつた。最後になつて気づくこともある。二年間、本当に有り難うございました。有終の美、閉校を迎えられますことを祈りいたします。春も間近であつても浄法寺校の周囲の雪は未だ消えず。しかし、雪はいずれ消える。平成二十七年三月、最後の勤務日。

浄法寺高校の思い出

昭和四十七年四月〜昭和五十三年三月在職

戸 羽 久 之



私は、昭和四十七年四月、福岡高校の定時制分校から全日制に切り替わり浄法寺高校として独立するときに赴任しました。分校三年、独立して浄法寺高校三年計六年浄法寺の地に勤務しました。

赴任初年は定時制生徒（二年生から四年生）が五十三名在籍し、全日制生徒として九十五名が入学しました。生徒数が増えたことから、学校として生徒会の部活動について話し合った結果、教員が指導できること、必要な道具は必修クラブの予算を確保することの二つの要件を満たし、弓道部を創部することが出来ました。

最初は予算の関係もあり多くの道具（特に弓）を購入できないので初心者用の弱い弓を使用

する女子部員を募集したのですが、是非弓道を、と意欲ある男子も入部し、少人数ながら男女揃ったの部活動が始まりました。

校庭の片隅で渡り廊下の壁に二枚の古い畳を立て掛け、一つの的を置いての活動でした。

部活動開始初年度は楽しみながら、二戸市や一戸町、三戸町の大会に、個人戦のみ出場しました。

次年度からは部員も増え、一団体三人のチームも組めるようになり団体戦にも参加できるようになりました。四十八年には遠野高校で行われた県高校総体の男子個人戦に出場し、四十九年には高校総体には女子も参加し沢田典子さんが個人六位に入賞しました。

五十一年の県民体育大会は試合形式が変わり、少年の部が市と町村の部とに分かれて競技し、優勝旗は一位同士の争奪戦をすることになった年でした。少年男子は、市の部で福岡高校、町村の部は浄法寺高校が勝ち、優勝旗争奪の競射となりました。

実力ある福岡高が相手でしたが、私は一人一射の競射なら、『格下相手に負けられないと気負ってくれると勝機がある』と思いながら応援していました。結果は二対一で浄法寺高校が勝ち、初の優勝旗を手にしたのでした。そのときの嬉しさは今でも覚えています。

メンバーは三浦奨君、樋口政行君、三浦正君でした。

五十一年の高校新人大会では円子美江子さんが女子個人二位となり、五十二年高校新人

大会では男子田口信広君が射道優秀賞をもらうことが出来ました。

浄法寺中学校横の分校校舎から高台の新築校舎に移ってからの活動は、自転車置き場に畳を置いての練習、その後は道路下の空き地に場所を移し練習をしていました。練習場所に塚を整備しようと砂子田さん中心に町内有志が働きかけてくれたのもこの頃でした。そして五十三年三月にプレハブの弓道場が整備されたときは本当に嬉しく生徒とともに喜んだものです。お世話頂いた皆様には今でも感謝しております。

その他の思い出は、田山スキー場でのインターハイで、全校で手伝ったこと、特に準備から手伝い、ジャンプ台整備では、てっぺんから生徒数名と腕を組んで横に並び、雪を固める作業をしたことです。あれは相当怖い思い出でした。

女子バレー部は大会が近づくと、対外試合の少なさをカバーしようと練習相手として教員がチームを組んでも汗を流したこともありましたが、試合はいつも接戦になり、楽しいものでした。

もう四十年ほど前のことになりましたが、初めての高校赴任であった浄法寺高校の思い出は、今でも記憶の大きな場所を占めております。

浄法寺高等学校の思い出

昭和四十九年四月〜昭和五十六年三月在職

米川次郎



浄法寺高校にお世話になった七年間を回想するとき、どうしても二つの空間での場面が、それぞれ走馬燈のごとく現れ、その二つの空間を結びつけ、筋書きとして認識することは無意識的にはなかなか難しい。

その極端に違う二つの空間とは、一つは浄法寺町小池の木造旧校舎の時代での生活であり、一つは清水の白亜の新校舎での活動である。

いずれも優れた要件を備えた特長ある教育環境であった。

分校時代を含む旧校舎での生活は狭さを感じる不便さはあるものの、こぢんまりとして木の温もりを感じながら家庭的な雰囲気の中での生活で、自然に人の心を和ませ、ゆとりを持たせる効果があったように思われる。

その校舎での活動の心理的場面として思い出されるのが、赴任した年に全日制分校最後の学年を担任することができ、大規模である前任校との歴然とした違いに驚きながら、何か忘れかけていた生徒との係わり方が、家族の誰かに接するように自然に変わっていったことである。

福岡高校浄法寺分校最後の卒業生を送ると、既に決定している浄法寺高校の創造に生徒、職員、そして同窓生、PTA、町当局はもとより、町全体が一致協力して進むものであるが、短期間の遂行のため、そのエネルギーのすさまじさには目を見張るばかりであり、その中に自分もいて、そのことが自分のことのように誇らしく感じたことを覚えている。

白亜の校舎が清水の高台に少しづつその姿を現してくると、その進捗が気にかかり、帰途現場に立ち寄り完成した校舎が地域の自然に溶け込む殿堂全体のイメージを勝手に想像することは楽しいことであった。

拙い経験からすると、校舎、体育館、格技場、弓道場、そしてグラウンドが短期間で一挙に整備されることなど滅多にないことであるので、完成したその全容に驚くと共に、新校舎での生活が何不自由なくスタートできたことは大変幸甚なことであった。

分校から独立校への移行時に在職した者として、その短い準備期間に大変な経験をさせていただき、その後の自分の生き方に大いに役立ったことであり、指導を受けた校長先生、そして苦勞を共有した同僚や関係した方々に

衷心より感謝している。

浄法寺高校に在職中には、数え切れない思い出があるが、強いて記すとすれば創部間もないスキー部が、県高体連大会で女子総合優勝の栄を勝ち得たことと、インターハイでの入賞と、山本留美子選手が国体少年女子の部で見事栄冠に輝くなどの、輝かしい業績を残せたことである。

私の三十六年に及ぶ教員生活のなかで、鮮明な映像として脳裏に焼き付いている浄法寺高校の閉校は誠に残念であるが、脳裏の映像は不滅であり、清水の高台で共に過ごした多くの同僚や関わった生徒諸君に感謝し、思いの一端といたします。



初代相撲部監督としての

思い出

昭和五十年四月〜昭和五十八年三月在職

真 崎 良 平



国体相撲競技東北初の総合優勝を達成した時の教員選手団の一員として出場した小生は、感動的な閉幕を迎えてから数年経過した頃、現役選手兼指導者として岩手県相撲レベルの向上を目指して沿岸部の高校に勤務していました。そんな折、浄法寺高校にと地元在任の県相連幹部役員から熱心な声掛けをいただいて浄法寺高校に着任しましたが、事前の内容とは全く異なり部員は一人だけという状況。それが全国的に相撲強豪校となる浄高相撲部創立時の現実でした。全く零という段階からの相撲部初代監督としての記録を限定された字数内でまとめ、寄稿文とさせて頂きます。八年間の在任中で相撲道場で寝食を共にし

た愛弟子は諸氏多数おりますが、前述通り字数制限があり、具体的氏名を列挙する選手は全国大会出場し好成績を残した極々一部選手とさせて頂きます事をご容赦願います。

部の創立から三年間、新設小規模高校相撲部を全国水準までと師弟共々固い決意のもと、心技体の充実を日々心掛け努力精進し、地元関係諸氏から絶賛された選手が、現市職員として活躍されている「館山徹氏」です。インターハイ個人の部予選通過と青森国体県少年選抜選手団大将として、小生赴任以来県勢初となる団体戦ベスト8進出を決定した相撲内容は、現在でも鮮明な記憶として残っている大一番です。三年間常に前向きな姿勢で取り組んだ彼の果たした役割が、その後の全国の伝統強豪高校から「岩手県に浄法寺高校あり！」とマークされる契機となった特記すべき選手であります。

館山選手は、高校時代の大会実績が認められて、小生の母校の監督から勧誘され大学へ進学しました。最上級生のときは、主将として活躍し、大学選手権大会等の諸大会で目覚ましい活躍をし、卒業後に帰郷して後輩選手の指導に励んでくれた事に感謝します。

次に全国大会で大活躍して浄高の名を一段と高めた選手四名を具体的氏名を挙げてまとめます。

全国高校選抜四大会中、十和田大会で団体準優勝を果たした「小野雅彦氏・玉川昌勤氏・姉帯恵一氏」です。彼らは、高知大会・宇佐大会にも出場し、体力的に劣勢でありながら、

抜群の精神力と卓越した技能を遺憾なく発揮し、大型選手揃いの他校選手と互角以上の対戦成績で、全国高校相撲番付に浄高の名を残した三者三様の相撲取り口でした。大観衆を魅了した三選手のすばらしい記録は岩手県相撲連盟史に燦然と輝く実績として残されています。

また、十和田大会準優勝時には交代選手として登録していた「小田島哲男氏」は、大学卒業後の成年の部国体個人優勝や後年の秋田国体で岩手県選手団の旗手として大役を果たしたことも付記し、母校で全国諸大会で大活躍した数多くの選手の諸指導を担った事も付記させて頂きます。

限られた字数で、相撲部愛弟子諸氏の素晴らしい大会実績等をまとめ、在任期間中に物心両面で全面的にご支援を頂いた地元相撲関係各位に心から感謝し結びとさせて頂きます。



小さくともキラリと光る 学校の思い出

昭和六十年四月〜平成二年三月、
平成二十四年四月〜平成二十六年三月在職
現岩手県立宮古高等学校副校長

千葉 治



浄法寺高校に、昭和六十年四月から五年間、
浄法寺校に二十四年四月から二年間、勤務を
させて頂きました。

一度目の勤務では担任もやらせていただき、
生徒とのふれあいを通して、大きく成長した
ような気がしています。何かを残したという
ことはありませんが、文化祭でのプラネタリウ
ムは達成感がありました。未経験のサツカー
部の指導は忘れることができませぬ。ほとん
どの部員がサツカーの経験がなく、負けるこ

とが当たり前でした。ある大会で、役員の方
から「浄法寺のようなチームを指導してみたい」
と声をかけられました。部員みんなが一生懸
命やっていることを分かってくれる人がいる
ことに感激したことは忘れられません。私生
活では、校舎近くの公舎に住み、先輩の先生
方にたくさん遊んでいただきました。春から
秋は、安比川での釣り、冬は一生の趣味となっ
たスキーも指導していただきました。今思え
ば最高の初任地でした。そして、毎日のよう
に通った藤田屋のおばちゃんは、まさに恩人
です。ありがとうございます。

二回目の勤務時では、初任時の教え子たち
が四十歳前後に達しており、平成二十四年度
の入学生十人のうち四人の保護者が教え子で
した。当時の生徒、保護者の方々を含め、町
内で多くの暖かい言葉をいただきました。
特にも、浄法寺校を支えていた堀口教育振興
会会長様、三浦同窓会長様をはじめとする同
総会役員の皆様と、微かに面識があったこと
や、学校技術員の姉帯さんが勤務されていた
ことは大きな助けとなりました。

学校は、生徒数は三十名に満たないものの、
先生方のがんばりもあり、生徒が生き生きし
ていました。体育祭では、七割近い保護者が
参加し調理した豚汁等をいただき、そのお礼
に全校生徒による集団行動の演技を披露しま
した。演技後の大きな拍手とカメラのフラッ

シュに照らされた生徒の満足感漂う表情に感
激しました。文化祭では、地域の方二名を指
導者としてお願いし、猛暑の中で古タイヤを
敲いて練習した太鼓を浄法寺祭りで披露しま
した。地域の皆様よりたくさんの方の拍手をい
ただき、指導していただいた方の「感動した。
泣きそうになりました。」との言葉が最高の賛
辞となりました。部員数一人（四人は他の部
からの助っ人）で最後の高総体出場で団体準
優勝し、「相撲の浄法寺」を守った生徒。少人
数でありながら新人大会で予選通過を果たし
部昇格を勝ち取ったバスケット班。校長先生
を泣かせて見せようと企画されたサブライズ
還暦お祝い会、全生徒の笑顔を体育館ステー
ジいっぱい描き、見る人を驚かせたモザイ
ク画。……たくさんの方が生徒の心に残り、
成長を促したものと感じました。小規模であ
ることをハンデとせず、武器とした生徒のが
んばりと先生方の取組は賞賛に値するもの
と思います。私生活では、春から秋は、野田の
公舎に住み、野菜をつくり、冬は我が儘言っ
てスキー場の近くに住んでのナイタースキー。
十分楽しませていただきました。

浄法寺の地で、多くのことを学び、成長さ
せていただきました。生徒、PTA、同窓会、
地域の皆様に改めて感謝申し上げます。